

子どもに見せたい舞台 vol.10 『モモ』 脚本・演出 吉田小夏（青☆組）インタビュー

「子どもたちに舞台の楽しさを知ってもらいたい、劇場を身近に感じてほしい」と毎夏上演され、今年10回目を迎える「子どもに見せたい舞台」。12年間の活動のフィナーレを今秋に迎える、にしすがも創造舎の体育館の劇場から、東池袋あうるすぽっとに場所を移して5年目となるのが、青☆組の吉田小夏が脚本・演出を務める『モモ』だ。言わずと知れたミヒヤエル・エンデの名作。演劇界きっての文学少女だった吉田ならではの作品選びかと思いきや-

▽この企画は作・演出家が作品を提案できるそうですか、吉田さんが『モモ』を選んだ理由は？

率直に言いますと、青☆組の劇団員を起用してもいいというお話でスタートしたのですが、彼らが『モモ』のキャラクターとそっくりで、これなら素敵に3次元になるんじゃないかなと思ったからなんです。『モモ』について私自身は漠然とは思いついたんですけど、細かいところまではわからなくて読み直したんです。けれど読んでいるうちに向こうから「私でしょ」って近づいてきてくれた感じで、いろんな発見がありましたね。読んでいなかったわけではなかったんですけど、きっと作品を読めていなかったんでしょうね、もう一度出会い直せたと思ったわけです。

「子どもに見せたい舞台」は、子供と大人が同じ空間でお芝居を見られるのがいちばん素敵なところ。子どものころに読んだ物語が演劇になることで、大人も改めて勇気をもったりできるんじゃないかな、『モモ』はその要素が強いんじゃないかと思ったんです。子どもは子どもの、大人は大人の、それぞれの視点で、ワクワクできる作品だと思います。



▽読み直してみてもの新たな発見というのは？

『モモ』の日本初版が自分が生まれた1976年だったことにまずドキッとしました。現代はすごくデジタルな環境の中で時間や豊かさの感覚、さまざまな価値観などが私が生まれた昭和からするとものすごく変容している。灰色の紳士たちが時間を奪っていくという物語は、そのことに対する危惧が描かれていたんだということにすごくショックでした。私がいちばん面白いと思ったのは自分の体の中にある時間と、体の外に存在する時間はまったく別のもの、というところ。取り出してしまったら本当の時間ではなくなってしまうし、盗まれた時間は全力でもとの人間の中に戻ろうとするのだという、その場面がインパクトありましたね。自分は自分自身の時間と本当に向き合っているんだろうか・・・、大人になって読み直していちばん盛り込みたいと思いました。

▽舞台化するとき意識したことはありますか？

原作があるときは、文学としての力強さとのせめぎ合いです。『モモ』はストーリー展開そのものよりディテールがすごく魅力的。展開を追うのではなくて登場人物の生き方や関係のもち方に注目して、あの人が好き、私はあの人に似ているとか、そういうふうに見えるようにディテールの濃さを残そうと思っています。英語の歌詞を意識して、むしろ核を残すという感覚ですね。

子どものころは気がつかないんですけど、ミヒャエル・エンデは舞台俳優だったんです。再読したり、エンデの資料を当たり直したときに、旅回り興行をしていたとか、屋根裏に劇場をつくったりとか、ブレヒトを学んだけれどやっぱり違うと挫折したとか、若い時代にどっぷり演劇につかっていた。それをわかって読んでみたら、腑に落ちるところがいっぱいありましたね。特に語り部が読者に直接語りかけるのは、完全にブック劇場というか本から演劇が飛び出すよう。最初は、演劇化することで原作が大好きな方ががっかりしたらどうしようとか思いましたが、エンデさんは演劇にしたかったんだとすごく勇気がわきました。それだったらこういう見せ方をしようと、セリフやト書きの時点であれこれ盛り込んでいます。今回はある役を取り出して、狂言回しとしての語り部に仕立て上げていますが、それがキーになっていますね。生身の人間が生身の人間にお話を手渡すという素晴らしさ、想像を広げて楽しむことの素晴らしさが原作に入っているの、原始的な演劇の喜びを届けたいと思っています。

あとは登場人物がいっぱい出てくるんですけど、出演者は9人だけです。兼ね役をするんですけど、人間の多面性、大人の俳優だけどもともとは子どもだったんだから子どもにもなりうるのか、一人の人が持っているいろいろな要素が見えたらいいなと配役を考えました。

▽これまで子ども向けをうたったプロジェクトにもかかわっていますよね。そのときに意識していることはなんですか？



一番は暗転を入れない、ですかね。大人とは違う子どもの生理的な感覚を前提としてはいちばん気にしています。あと“ゼロ場”を必ずつくりません。ロビー開場の段階での工夫ですね。音楽を流してみたり、キャストが客入れをしてみたり。開場中に子どもたちに見る準備をしてもらうということですね。明るいもの楽しいものを提供して、劇場は怖い場所ではなくて、楽しいことが始まる場所なんだよというメッセージを伝えられるように。

それからリズムや語感、音楽の入れかたはすごく気をつけています。やっぱり言葉がわかって楽しむことができるのはある年齢から上なので、言

葉やお話を追いきれないお子さんが混じっているときに、そうした要素を定期的に入れるように。ここは子どもには少し難しいけど挑戦したい、と思う場面などは特に気をつけます。

面白いのは、仲違いしている二人がどうにか仲直りしたいだとか、誰が誰が好きだとか、そういう人間関係に関しては想像以上に小さな子どもも何かを感じてくれるので、やりがいを感じますね。

個人的なところでは、宝塚好きだった少女時代の自分の感性がばんばん出ていますね。そういう意味では少年少女気分を満載にできるのがふだんとは一味違う。本当は大人向けのときも出せるものなら出したいんですけど（苦笑）。

（取材/文/写真 今井浩一）